

へき地の保護者と教員が抱く児童観： 人間関係，コミュニケーションスキル，競争心について

今 在 慶 一 朗
(北海道教育大学・函館校)

Parents' and teachers' views of rural children: Children's human relation, communication skill, and competition

Kei-ichiro IMAZAI

はじめに

へき地教育に関する先行研究では、しばしば極めて否定的な児童観が示されてきた¹。それによれば、へき地の児童は都市部の児童よりも学習意欲や社会性に欠けることが指摘されている。そうした主張は、へき地教育の質的向上を意図して、改善すべき現状の課題を指摘したものであるものの、あまりに否定的かつ直接的な指摘であるため、その内容についてはにわかには信じがたい印象さえ受ける。

へき地学校における児童のパーソナリティが歴史的にどのようなものであったのか検証することは非常に困難

である。しかし、へき地教育への取り組みに対して好意的な複数の研究者によって、同様の指摘が行われてきたことを考慮すると、へき地の児童のパーソナリティには否定的な傾向があるとする認識を、また、これを解決していくことが教育上の課題であるとする認識を、当時の教師や研究者が広く共有していたことは事実であろう。

ところで、注で示したように、こうしたへき地における児童観は、おおむね40年以上前のものである。生活水準が向上し、産業構造が変わり、道路網が整備され、情報化が進み、高等教育機関への進学率が上昇した現在、へき地とされる地域に暮らす児童の生活環境は大きく変化した。近年では、へき地学校では小規模校が持つ特性を活かせることを指摘する見解も見られ(北海道立教育研究所・北海道教育大学, 2001)、へき地とされる地域で学ぶ児童が発達上、必ずしも不適当な環境におかれているとは限らない。

本研究では、道南のある小学校をとりあげ、現代の保護者ならびに教員が抱く児童観や学校をはじめとする教育環境に対する印象について検討する。

調査 1

調査は道南の準へき地に指定されたU小学校で行われた。U小学校は、児童数22名、学級数4(特集学級1を含む)の小規模校である(平成22年4月現在)。職員は、校長、教頭の他、教諭は4名、養護教諭1名、事務員1名からなる。

調査は平成21年度の11月に行われた。対象は児童の保護者と教員である。二つの設問について、自由記述式で回答を求めた。学校宛に質問紙を郵送し、学校が一括して質問紙を配布、回収した。

1. 「へき地の子どもは、無気力であり、学習意欲がなく、表現能力が不足しているなどといわれる。このような教室での学習態度は、客観的に学力の低さとして表されるものとされる」(溝口謙三, 1962)。(情緒的社会的発達の特徴として)「非社会性」「まじめ」「仕事を熱心にする」「現実的な思考態度」「粗野、無関心」「自信の欠乏」「劣等感」(米増勲, 1968)。「少人数学級では、競争心が弱く、学習意欲に欠けやすい傾向になりがちである。言語コミュニケーションが少なく、序列意識が固定化し、刺激が少なくなれあいに流れやすいなど学習の成立条件を阻害している要因が多い」(全国僻地教育研究連盟, 1976)。(児童の短所として)「体格が小柄で、体力、耐久力が不足」「偏食がちで病気にかかりやすい」「行動が粗野で礼儀作法にかける」「知能に比べ学力が低い」「個人差が大きい」「生活経験領域が狭い」「生活の計画性に欠ける」「子どもらしい気迫、たくましさ欠ける」「自己中心的、受動的、排他的」「思考、発想の多様性、論理性不足」「言語が軽率で巧み性、柔軟性不足」「集中力、決断力に欠ける」「話を聞きとる力に欠け、語いが不足」「学習意欲と学習技能にかける」(北海道複式教育連盟, 1978)。

第一の設問では小規模校の長所についてたずねた。この設問では、子ども自身に関するもの他、教師や保護者に関するもの、学校の設備や運営に関わることでも回答可とし、複数回答可とした。

保護者の回答についてみると（表1-1）、児童に関わることについては、学年を超えて児童が仲良く生活でき、多数に埋もれることなく成長することができる、自然環境と地域社会が学校教育を豊かにしているといった回答が多かった。それ以外の点については、教員が児童の様子を把握しやすく対応が丁寧、保護者と教員が学校の運営に関与しやすいといった回答がみられた。

表1-1 長所についての回答（保護者）

<ul style="list-style-type: none"> ●児童に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 学年や性別を超えて仲良く生活できる 5 ② 地域の人と触れ合う機会がある 4 ③ 学年を超えた活動を通して助けあいや思いやりの精神が育つ 2 ④ いじめがない 2 ⑤ 上級生が下級生の世話をするようになる 1 ⑥ 一人ひとりの個性に応じて長所を伸ばせる 1 ⑦ 児童が自分で決断する機会が多い 1 ⑧ 自然に関わる勉強や体験ができる 1 ⑨ 少人数でしかできない体験ができる 1 ●教員に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 教員の目が届き、学習、学校生活に関して教員の対応が丁寧 12 ●保護者に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 児童、保護者、教員の顔と名前が一致する 1 ●学校運営に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 保護者や地域の人が行事に参加しやすい 2 ② 教師、児童、保護者が一体となって行事を楽しめる 1 ●無回答 1
--

注. 文末の数字は回答数。

教員の回答についてみると（表1-2）、児童にかかわることについては、豊かな自然の中で、一人ひとりに活躍の機会が与えられやすく、素直で思いやりのある児童が育ちやすいという回答が見られた。それ以外の点については、児童一人一人に向き合うことが容易である、教員が保護者や地域住民と理解を深めやすく連携しやすい、状況に応じて迅速、柔軟に活動することができるといった回答がみられた。

表1-2 長所についての回答（教員）

<ul style="list-style-type: none"> ●児童に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 自然に親しめる 2 ② 児童たちが純粋・素直 1 ③ 児童たちが活躍しやすい 1 ④ 上級生が下級生の世話をするようになる 1 ●教員に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 個別の指導が可能 3 ② 担当学級以外の児童と関わるができる 1 ●保護者に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 保護者と相互理解しやすい 2 ●学校運営に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 新しい計画を実行しやすい 2（うち一件は「移動や準備が容易なので活動の幅を広げることができる」） ② 他の教員との相互理解しやすい 1 ③ 地域社会と相互理解、連携しやすい 1
--

注. 文末の数字は回答数。

同様に、第二の設問では小規模校の短所についてたずねた。保護者の回答についてみると（表1-3）、児童に関しては、交友関係が限定的で保護や支援を受けやすい環境で育つため社交性が育ちにくく視野が狭くなりやすいことを心配する様子が見られる。また、長所の裏返しで、教員が手をかけすぎること懸念する回答がみられた。

表1-3 短所についての回答（保護者）

<ul style="list-style-type: none"> ●児童に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① コミュニケーション能力・社交性が育ちにくい 4（うち一件「中学校に行ったときに他の生徒と関係を築きにくい」） ② 児童の友人関係が固定化 3 ③ 視野が狭くなる 1 ④ 教員が手をかけすぎることになる 1 ⑤ 現在の環境が将来生活する場になりえない 1 ⑥ 行事等で児童が果たす役割が多くなる 1 ⑦ 多人数での活動ができない 1 ●学校運営に関わること <ul style="list-style-type: none"> ① 教員が果たす役割が多くなる 1
--

注. 文末の数字は回答数。

教員の回答については（表1-4）、交友関係が限定的になるため、競争心や幅広い人間関係の育成が難しいという回答がみられた。

表1-4 短所についての回答（教員）

-
- 児童に関わること
 - ① 競争心が育たない 4
 - ② 児童の友人関係が固定化する（うち一件「他校との交流をもっとするとよい」） 3
 - ③ 大人数でなければ体験できないことが体験できない（うち一件「スポーツ」） 2
 - ④ コミュニケーション能力・社交性が育ちにくい（うち一件「他校の児童とうまく交流できない」） 1
 - ⑤ 中学校での人間関係が心配 1
 - ⑥ 学年を超えて活動するため、低学年がついていけなかったり、高学年がもの足りなかったりする 1
 - ⑦ 熊や蛇が出るので危険 1
 - ⑧ 通学路が遠い 1
 - ⑨ 防犯上の心配がある 1
 - ⑩ 授業の進み方が遅いのではないかと心配 1
 - ⑪ 割り当てられる役割が多い 1
 - 教員に関するもの
 - ① 複式学級なので教員の負担が大きい 1
 - ② 割り当てられる役割が多い 1
 - 保護者に関するもの
 - ① 割り当てられる役割が多い 4
 - ② 移動が大変、車で送迎しなければならない（うち一件「スポーツ少年団・習い事」） 4
 - 学校運営に関するもの
 - ① 人数が少ないため行事がさびしい 2
 - とくにない 1
 - 無回答 1
-

注. 文末の数字は回答数。

回答を総合すると、保護者と教員の間で回答内容に大きな差異は見られないようである。

(1)教員が児童ひとりひとりの個性を伸ばせるように丁寧な学習指導、生活指導を行えること、(2)児童が良好で安定した人間関係の中で学習できること、(3)自然環境や地域住民といった地域資源を活用しやすいこと、さらに、(4)児童を支える保護者、教員、地域住民が意思疎通を図

りやすく、協力関係を維持しやすいことが長所と捉えられている。

その一方で、こうした長所と考えられるポイントのうちいくつかは、同時に短所としての側面を持ち合わせている。上記(1)や(2)は児童の競争心や社会性をはぐくむ際の障害になっている可能性がある。また、周囲の豊富な自然(3)は移動の不便の原因であると考えられる。

加えて、児童の人数が少ないことは、集団で行うスポーツができないなど児童の学習経験を直接限定するだけでなく、それは同時に保護者、教員の人数も少ないことを意味しており、行事などで割り当てられる役割の負担が大きくなることにつながりやすいことがうかがえる。児童が少ないため、個々の作業量は多くないのかもしれないが、一人の個人が多様な作業を割り当てられることになるのではないだろうか。

調査 2

調査 1 では児童の人間関係のよさを挙げる回答が目立った一方で、競争心や社交性の乏しさを懸念する回答がみられた。競争心や社交性については、へき地の児童に関する先行研究でも指摘されていたことである。そこで児童の人間関係、コミュニケーションスキル、競争の行動の具体的様子やその原因を明らかにすることを目的として、二回目の調査を行った。第一の調査を実施したU小学校に再度調査を依頼したところ、再び質問紙による調査について協力を得ることができた。

質問紙では、Ⅰ. 良好な人間関係、Ⅱ. コミュニケーションスキル、Ⅲ. 「競争心」に関する質問群と、Ⅳ. 人間関係や社会性に影響を与えると思われる小規模校の特質についての質問が設定された。

良好な人間関係について はじめに「学年や性別に関係なく仲良く生活している」と思われる具体的な出来事や場面があるかたずね、「ある」と回答した場合には、それはどのようなことか、また、そのようになった原因についてたずねた。保護者の回答では（表2-1）、回答者全員が良好な人間関係に関する事実があると回答し、学校の内外を問わず児童の人間関係がよいとしている。その原因としては、集団で遊ぶためには学年や性別にこだわってられないという制約があると考えられる。教員の回答についてみても、結果はほぼ同様であり（表2-2）、少数であることによる弊害の解決策の結果として、人間関係が良好になると考えられている。また、校外の地縁・血縁が児童の人間関係の基盤になっていることも指摘されている。

表2-1 良好な人間関係についての回答（保護者）

① 事例の経験	「あり」10 「なし」0
② 出来事の内容	「行事、休み時間、登下校時、一緒に仲良くしている」6 「休日に遊んだり、互いの家に行き来したりしている」4 「年長者が年少者の世話をする」2
③ 推測される原因	「人数が少ないから必然的」8 「保育所からのつきあい」2 「学校の方針」1 「思いやりがある」1

注. 文末の数字は回答数。

表2-2 良好な人間関係についての回答（教員）

① 事例の経験	「あり」5 「なし」0
② 出来事の内容	「一緒に遊ぶ」4 「一緒に登下校」2 「上級生が下級生の世話をする」1 「行事などでかかわる」1 「全員が互いに名前を知っている」1
③ 推測される原因	「人数が少ないので学年や性別に子だっているのは活動できない」3 「親戚や近所の子どもがいる、親同士のつながりがある」2 「遊びをとおして」1

注. 文末の数字は回答数。

コミュニケーションスキルについて 次に、人間関係についての質問と同様、「コミュニケーションスキルが乏しい」と思われる具体的な出来事や場面があるかたずね、「ある」と回答した場合には、それはどのようなことか、また、そのようになった原因についてたずねた。保護者の回答を見ると（表2-3）、そうした事実はないとする保護者の方が多く、後述する教員と比較して、児童のコミュニケーションスキルについては問題を感じていないようである。ただし、回答数は少ないが、他者への配慮が欠けていることを指摘する回答もみられた。これ

に対して、教員による回答（表2-4）については回答者数自体が少ないものの、コミュニケーションスキルが乏しいと感じる事実が挙げられた上で、その原因と考えられる事柄についても具体的な内容が複数記述されていた。それによると、全体的には公の場で積極的な自己主張をする児童は少ないが、一部に積極的に発言する児童がおり、発言に関して役割分担が発生している様子がかがわれた。また、気心の知れた特定の相手とだけ話すことが多いため、言語表現のスキルが発達しにくくなることを示唆する回答もあった。

表2-3 コミュニケーションスキルの乏しさについての回答（保護者）

① 事実の有無	「あり」3 「なし」6 「わからない」1
② 事実の内容	「外で遊んでいる子どもを見たことがない」1 「少数者だけの関わりが多い」1 「『かして』と言わないで人のものを借りて怒られていた」1 「他人が何を考えているのか考える前に怒ったりけんかしたりする」1
③ 推測される原因	「ゲームばかりしている」 「幼い時から他の子どもとかかわる経験が少なかった」

注. 文末の数字は回答数。

表2-4 コミュニケーションスキルの乏しさについての回答（教員）

① 事実の有無	「あり」4 「なし」1
② 事実の内容	「積極的に意見を言えない」1 「人見知りする」1 「特定の人物の意見が目立つ」1 「適切な言語表現ができない」1
③ 推測される原因	「言語表現しなくても察し合える関係」1 「言語表現できないことによって困った経験がない」1 「多人数での話し合いの経験がない」1

「苦手意識がある」 1

「一人一人と時間をかけて話すことができる」 1

注. 文末の数字は回答数。

「競争心」について さきの二つのテーマと同様、「競争心が乏しい」と思われる具体的な出来事や場面があるかたずね、「ある」と回答した場合には、それはどのようなことか、また、そのようになった原因についてたずねた。保護者の回答を見ると（表2-5）、事実があるという回答数とそれ以外の明白に事実を挙げるのがない回答数が同じであった。調査1で競争心の乏しさを指摘したのが教員であったことを考えると、保護者にとってこの点はあまり大きな問題点とは感じられていないのかもしれない。原因について記された回答を見ると、そもそも比較するほど児童が少ない、あるいは同じ力量の児童が少ないため他学年の児童と活動する制約から年長者は全力で活動することが少なくなるといった、人数の制約を原因と考えるものがここでも見られた。また、自己の個性や他者との協調性を重視することが原因であるとする回答もあった。これに対して、教員による回答を見てみると（表2-6）、競争心が乏しいとする回答がほとんどで、事実も多く示されていることから、この点について教員が関心を寄せている様子うかがわれた。それらを総合すると、少人数であることによって、1. 不特定多数の中で競争した場合よりも順位を上げることが難しく、一旦他の児童との実力差が固定しているという印象を持った児童は、向上心が抑制されやすくなる、2. 一人一人の児童が尊重されやすいため競争する必要がなくなるといったことが原因として考えられている。また、2個学年編制の複式学級では児童が隔年で年長学年と年少学年を経験するためか、年少者、年長者とも、年長者がリーダーシップをとる仕組みに慣れており、異年齢間での競争が生じにくいと捉えられているようである。

表2-5 競争心の乏しさについての回答（保護者）

- ① 事実の有無
「あり」 5
「なし」 3
「わからない」 2
- ② 事実の内容
「学習、運動」 3
「あることが得意な子供がいると、そのことについてはかなわないと決め付ける」 1
「他の子どもができるのに自分ができないことがあっても気にしない」 1

「競い合うほど人数が少ないので、運動は力を加減して他学年と楽しく行うことを重視する」 1

「仲の良い子供と同じことをしようとする」 1

③ 推測される原因

「比べるほど他の児童が少ない」 3

「自分は自分と考える」 1

「ゆとり教育、現在の教育方針」 1

「1人でがんばることより、助け合ってがんばろうとする」 1

注. 文末の数字は回答数。

表2-6 競争心の乏しさについての回答（教員）

- ① 事実の有無
「あり」 4
「なし」 0
未回答 1
- ② 事実の内容
「テストなどで他の『できる』児童を見ても、自分とは違う存在として捉え、はじめから勝とうとしない」 1
「学習活動、運動会などで多少競争心はあるが、あきらめが早い」 1
「学習活動、運動会などで競争せず、力を加減して他の児童に合わせようとする」 1
「指示待ちの姿勢」 1
「学力向上への貪欲さが無い」 1
- ③ 推測される原因
「人数が少なく、いつも同じ順位になりやすいため、競争しても順位が変わらないと思っている」 2
「一人一人が手厚い支援を受けやすく、競争しなくても存在が認められ、希望がかなえられやすい」 2
「少人数であるため、意見を述べる場が必ず確保される」 1
「高学年がリーダーシップをとることについて共通理解があるので、意見がぶつからない」 1

注. 文末の数字は回答数。

小規模校の特質について 最後に、児童たちの人間関係や社会性に関する小規模校に特有の事柄について、思いつくものがあれば記すよう求めたところ、明確に系統だった回答はみられなかったが、保護者、教員（表2-7, 2-8）の回答を通して、集団経験が少なくなるという否定的な回答が示された一方で、児童一人一人が尊重されやすいという肯定的な回答も見られた。また、教員の影響力が大きくなることを指摘した回答もあった。

表2-7 人間関係や社会性への影響についての
回答（保護者）

「人間関係が狭くなる」
「思いやりを持つ子どもが育つ」
「もっと他校の同学年同士の交流ができればよい」
「児童数が少ないからこそ行事で協力しやすく、一人一人の意見を聞き合える」
「一人一人の児童に目が届きやすい」
「保護者と教師が情報交換しやすい」
「教師の影響力が大きい」

北海道立教育研究所・北海道教育大学（2001）複式学級における学習指導の在り方～初めて複式学級を担当する先生へ

表2-8 人間関係や社会性への影響についての
回答（教員）

「大規模校よりも教員の影響力が大きい」
「人と接する機会、集団経験が少ない」
「家族的な思いやりのある環境」
「設備、教材、教具が児童一人一人に十分配分される」
「地域との交流」

今後の課題

今回の調査結果からは、児童の数が少ないことが良好な人間関係を育むと同時に、固定的な人間関係によってコミュニケーションスキルや「競争心」が伸び悩むことになることが示唆された。これは、先行研究の指摘と一致する結果といえる。こうしたへき地児童観は歴史的に一貫しているのであろうか。

しかしながら、本研究の結果をもって、へき地の児童のコミュニケーションスキルや「競争心」が都市部の児童に比較して未発達であるという結論を導くことには慎重さを要する。なぜなら、本調査対象が極めて限定された範囲であったこともさることながら、ここで示されたコミュニケーションスキルや「競争心」の不十分さは、保護者や教師の主観的な印象によるものだからである。今後は、児童を対象とした調査を通じて何らかの客観的な手法により、へき地児童の実態を明らかにしていくべきであると考えられる。

引用文献

- 溝口謙三（1962）へき地の子ども 東洋館出版社
 米増勲（1968）僻地教育 三和書房
 全国へき地教育研究連盟（1976）へき地学校の実践課題と指導
 北海道複式教育連盟（1978）明治図書